

経営学全書 5

経営学研究方法論

山本安次郎 著

丸善株式会社

経営学研究方法論

山本安次郎 著

丸善株式会社

著者の略歴

現職 南山大学経営学部教授・経済学博士
昭和5年 京都帝国大学経済学部卒業

経営学全書 5

経営学研究方法論

¥ 2,400

昭和50年12月20日発行

©1975

著 者 者 ^{やま}山 ^{もと}本 ^{やす}安 ^じ次 ^{ろう}郎

発 行 者 飯 泉 新 吾

発 行 所 丸 善 株 式 会 社

著者との申合せ
により検印省略

郵便番号 103 東京都中央区日本橋二丁目3番10号

印刷 曉印刷株式会社・製本 株式会社 星共社

3334-1505-7924

経営学全書発行にあたって

経営学に関する全書、全集は、かつて、また現在わが国においてもいろいろと刊行され、将来また新たな全集も少なからず、公刊されることであろう。それらの編集が、もとよりそれぞれ独自の意味をもち、またもつてあるが、その内容が経営学の全書といいながら、きわめて多様、多彩で、経営研究に関する固有の意味がかえって不分明なものが少なくない。それは、わが国経営学にはいくつかの学派、学説があり、それぞれきわめて異なった内容をもつことにもよるのであるが、むしろ「経営」の理解の安易さに起因することが多いと思料される点が多く、まことに考えさせられるものがある。

ここに本経営学全書を編集するにあたっては、いまや国際的に一般化しつつあるマネジメントを内容とする経営学の立場をとり、しかも、そのうちもともと固有な見地をとるオーソドックスの立場を堅持した。すなわち、新奇に追従することなく、しかも経営学発展に貢献する新学説、新主張は積極的に吸収し、固有経営学の血となし、肉たらしめることにより、その充実をはかるという立場である。このような経営学固有にして正統派ともいふべき諸課題を四十一巻の大冊に編集し、その各巻の執筆も、このような見地に立脚しつつ、しかも固有経営学発展のために長き努力をかたむけられた研究歴ゆたかなる学者諸氏に依頼した。著名なるわが国経営学者のうち、その学説、学派の相違から、執筆陣へ参加なき諸氏がいささか存在するが、残念なことながら、編集の基本方針によるものであり、またやむを得ることであつた。

したがって本全書は、国際的な、しかも国際的レベルの経営学を学習し、さらにきびしき経営の専門家としての能力の啓発を意図する研究者、教育者、さらに経営者自身にとって、正統派的研究の基本として役立つことを期待している。この意味において本全書は、未熟なる新学説を紹介して経営研究の参考の一助たらしめるよりも、むしろ本全書の研究を出発点として、能力開発に役立ちうる教科書的基本書たらんことを意図としたものである。これはやがて、わが国経営学が直面する混乱を救い、国際的水準への経営研究の向上に役立つとともに、さらに本全書は、この水準を抜いた、より高次な経営への発展の基盤ともなるであろう。今後、次々に発表される新説にも幻惑されることなく、正統的経営研究を基盤とし、この見地から採るべきは採り、学ぶべきものは吸収して、われわれの自力をもって経営学の充実、発展に資すべきである。本全書はその中心となり、基盤となるよう、経営研究の出発点として研究者ならびに経営者すべての座右にそなえられたいと念願するものである。

以上のような本全書出版の編集趣旨は、本全書執筆四十数氏によって賛同、支持され、ここにその質と量において、まれにみる全書を世に送り得た。全執筆者に心から感謝の意を表したい。また、わが国経営学の発展に、きわめて多大の犠牲と努力を払われる丸善株式会社出版部に謝辞を加筆することを許されたい。

昭和四十五年二月

山城 章

序 文

本書は経営学特に故馬場博士のいわゆる本格的な経営学の研究方法について著者が長い間考え続け一応到達した結論を論述したものである。「日本経営学会」も明年は創立五十周年を迎える。この間経営学という名称は普及し、経営学部や経営学科の創設とともに経営学の研究も戦前では予想もなかったほどの隆盛を見るに至った。しかしその経営学がどのような学問かは今日といえどもなお一致を見ているわけではない。経営学とはいっても、経済学や社会学に近いものから管理学に近いものまで種々様々な見解があり、甲論乙駁、そこには経営学説ではなくむしろ経営諸学説があるにすぎないというほかはない。ゾンバルトの表現を用いれば、経営学は月に関するのか地球に関するのかさえ不明であり、シュマーレンバッハにいわせれば、「方向喪失性の状態」にあるのである。クリーンツに従えば「マネジメント・セオリ・ジャングル」の状況にあるのである。このような学的状況を前にして、著者が本書で狙わんとするのは、あれこれの経営学ではなく、まさに「本格的な経営学」とはどのような学問か、それはどのような研究方法によって追求され、到達され、現成できるかを考察せんとしたものである。誰でも経営学に志したからには、研究方法論というようなものを書かないにしても、自己の固有のテーマとの関連において多かれ少なかれ経営学の本質について思いを致し、恐らく経営学とは何かについて思い悩み、研究方法について心を碎き、日夜呻吟していることであろう。真剣であればあるだけ悩みも深いに違いない。

顧みるに、著者が経営学理論を専攻し始めてから四十五年になる。当時は経営学の名称さえも論争の種で、学

間の性格はもちろん対象や方法や体系に至っては全く整っていなかった。経営学を専攻するにはどうしても学理を問題とするのはなかった。しかしその道は峻しく進めば進むほどいよいよ厳しく、絶望させられることもしばしばであった。驚馬に鞭打ちながら、「経営学の基礎理論を求めて」悪戦苦闘、気がついたら四十五年が経過し、古稀を迎えてしまったという次第である。誠に人生は短く、学問は長いのである。著者はこの間『経営管理論』や『経営学本質論』や『経営学の基礎理論』や『経営学要論』やその他の編著や論文など比較的少数の貧しい業績しかあげ得ず、顧みて忸怩たるものがあるけれども、思えばいつも経営学の本質の追求であり、本格的な経営学への努力であった。そしてこれまでの方法論的研究の総決算的体系化を試みたものが本書といっているであろう。その意味からは本書はこれまでの著書や論文の延長線上にあり、別に新しいものはないかも知れない。考え方がある程度まで固まってしまっているからである。しかし日本経済や日本の経営は今日転換期にあり、経営学そのものの考え方も根本から転換を迫られ、現代経営学という歴史的形態をとらざるを得なくなっている。著者はもとと小島昌太郎先生や作田莊一先生や上田貞次郎先生の伝統に従い経営学を「事業の学」ないし「経営の学」とする根本見地に立ち、しかも一方では経営史と経営学史の動向を注視するとともに、他方ではつねに経営の現実を直視し、現代の経営の根本問題を考えながら経営学理論を考えするという建前から、現代経営の新しい在り方を説く点において多少は新しい見地が展開されているといつてよいであろう。

翻つて思うに、著者が経営学の専攻を始めた頃、ドイツの経営経済学書を学んでも、どうも納得がいかなかった。アメリカやフランスの経営管理学書を学んでも同様にしっくりしなかった。失礼ながらわが国の諸先輩の研究を見ても、外国諸学説の紹介が多く、博引旁証、なるほど博学ではあるけれども、真に経営の現実には迫り、経営学に基礎をおく底のものに出会うことはほとんどなかったといつてよい。「経営の学」ということが忘れられ

ているように思われるのである。経営の現実を知れば知るほど世界の経営諸学説に対して批判的とならざるを得なかった。このようにして世界の経営諸学説の比較的研究から批判的研究に進み、不遜ながら、著者不動の見地が確立できたと思うに至ったのは、昭和十五年春から始めた満洲国建国大学での「西田哲学」の研究会を機縁とする経営哲学への開眼によってであった。この記念が『公社企業と現代経営学』にはかならない。この見地から諸学説を見ると、何れも経営存在の抽象的一面の研究にすぎず、「経営の学」としての経営学は、ドイツ流の経営経済学とアメリカ流の経営管理学との、経営組織学を媒介とする統一として確立されると考えられるのである。経済学という名称が万国共通で、課題も性格もインタナショナルであるのに、経営学の方は、その名称もドイツとアメリカでは異なり、対象も方法もナショナルリズムが強い。この特色は、科学としては後進性を示し未発達な状態にあることを示すというほかはない。ところで、ドイツ経営学はアメリカ経営学を知らず、アメリカ経営学はドイツ経営学を知らない（戦後相互の交流が始まりはしたものの）。然るに、わが国はドイツはもちろんアメリカもよく研究し、両者を比較し、批判し、統一して真にインタナショナルな「経営学説」を樹立し得る唯一の国で、それをわが国の経営学界の世界史的使命と考えざるを得ないのである。ところが、わが国の学界の現状はどうか。ドイツ経営学の専攻者はドイツしか知らず、アメリカの専攻者にはアメリカだけが世界である。本格的な比較的研究や批判的研究はほとんど見当たらない。著者から見れば、何れも隔靴搔痒の感を如何ともし難いのである。敢えて卒直にいうことが許されるならば、本書の狙いは極めて大きく叙上の如き世界史的使命に挑戦せんとしたものである。そこで、本書は自ら次のように四編九章から成ることとなった。

第一編は「序論」で経営学研究方法論の「課題と方法」を取り扱い二章からなる。まず第一章では経営学研究方法論の無用論と有用論との対立においてそれぞれの意味を考え、限定された意味で有用論を説き、有用性を積

極的に主張する。第二章では経営学研究方法論の基本問題を考える。ここは本書の内容の要約として重要であるから特に精読されることを希望しておきたい。著者の考えるところによると、経営学は文字通り「経営の学」であるから、経営学の研究方法は「経営の研究方法」——それによって経営学が成立する——と「経営学の研究方法」——それによって経営学の本質ないし基礎理論が解明される——とに分れる。経営学は「経営」——著者のいう「経営学的経営」——とともに始まり「経営」とともに終る。まず「経営の研究方法」は「時の構造」に従って歴史的研究方法と理論的研究方法と政策的研究方法に区別され、さらにその総合が考えられるであろうし、時代によって重点も異なるであろう。次に、「経営学の方法」であるが、誰が考えても経営学を学ぶにはこれまでの諸学説を知る意味にてここでもやはり歴史的研究方法すなわち学史的研究方法が不可欠であろう。ところで、経営学は「経営の学」であるといっても、その「経営」についても、また「学」についてもいろいろな考え方があって、経営学の歴史は経営諸学説の多様化と対立の激化の歴史であること上述の通りである。そこで学史的にただ諸学説の多様化の様相や理由を解するだけではなく、学史の動向から統一理論化への道を探求するため、さらに学理的研究方法が必要であろう。学理的研究方法としては、まず史料たる対立する諸学説の比較研究方法によって、諸学説の相違性とともに経営学としての同一性の基礎が解明されねばならない。かくて諸学説の比較的研究方法は、その発展としてどうしてもさらに批判的研究方法に進み、これによって経営学の統一理論ないし本格的な経営学説への道が解明せられることとなる。ところで、このような「経営学の方法」の結論と「経営の研究手法」との結論は期せずして一致するのである。本格的な経営学とは「経営学の方法」——経営諸学説の学史的、学理的研究——の結論たる「経営学説」たるほかなく、本格的な「経営の研究方法」によれば当然「経営学説」とならざるを得ないからである。

このようにして、第二編は「経営の研究方法」を問題とし、第三章では経営の歴史的な研究方法が、第四章ではその理論的研究方法が、第五章ではその政策的研究方法が相当に詳論されている。

第三編は「経営学の方法」を取り扱う。第六章ではドイツ、アメリカ、日本の経営学の起源、成立、発展が問題とされ、諸学説の対立や交替が考察され、やがて統一理論への動向が指摘される。第七章では歴史的に成立せる主要諸学説の学理的研究方法としてまず比較的研究方法が説かれ、諸学説の相違性比較から同一性比較へ進み、いわば批判的研究方法の準備がなされる。かくて第八章において主要諸学説の批判的研究方法が試みられ、経済学説、管理学説、組織学説の学理の批判的研究を通して批判的研究方法が確立され、自ら「経営学説」への道が準備される。経営学が「経営の学」、「経営の経営学」以外であり得ないことが明らかにされる。

第四編「結論」の第九章では、経営学説の必然性が明確にされ、経営学の将来が展望せられ、経営学がこれらの学問であり、時代が困難になるだけ重要となり、その将来は明るいという楽観説が結論されている。

以上が本書における著者の狙いと内容の概要である。これが果して経営学研究方法論の名に値するかどうか識者の批判に俟つはかない。私見に対しては極めて少数の理解者と多数の反対者のあることを知っている。経営学理論進展の為に忌憚なき批判を特にお願いしておきたい。著者はかねてから「本格的な経営学」はドイツ経営経済学とアメリカ経営管理学とを組織理論を媒介とする統一として成り立つと考え、努力もして来た。経営学も科学としては万国共通の学問とならねばならず、それはこの道を外にしては不可能ではないかと考えている。そしてそのような論理は「主体の論理」としての「経営の論理」であるほかはないと考えるものである。paradigm revolution を主張する所以である。思うにそれは大して難しいことではない。「経営の現実」に直面し、経営の現実的構造の把握に徹すればよいのである。それは経営史の動向、経営学史の動向の示すところであって、経営

学の道はこれしかなく、これは経営の現実を理解する最も近く最も容易な道であり、理論家にはもちろん実際家にも極めて理解し易く、実践的にも有効であると考えられる。実践的理論家の批判を特に乞いたいところである。

本書に着手してからまる三年が経過した。この間における成長経済の急激な変化、経営環境の激変と経営問題の質的变化や新しい問題の出現、これに対する新しい考え方や研究方法の抬頭、新しい哲学や思想の影響など考慮すべき条件は余りにも多く、経営学研究方法についてもたびたび再考を迫られ、厚い壁に妨げられて進退谷まり進路変更の止むなきに至ったことも一再ではなかった。しかし表面の小波に一喜一憂することをやめて、動いて動かない本筋だけは見つめて来た積りである。私的な感懷を記すことが許されるならば、この間著者の身邊にいろいろな異変があった。執筆を始めたのは昭和四十七年夏信州の山荘においてであった。翌年の夏も山荘で仕事ができ、第二編までは順調に進み、安易に考えて、昭和四十九年の夏にはできただけの原稿を印刷に廻し、後を続けることにした。然るにその春からの妻の難病を養う為に本居を離れ転々と居を移し、今春漸く長男一家と同居、安住の地を得ることができたのであった。転々としながらも執筆を続け、文献や資料の分散などもあって文字通り四苦八苦漸く完稿を見たのは八月十四日であった。人生の終着駅を前にしながら、推敲の不十分を承知の上で、本書を世に送らねばならない苦衷は堪え難いものがある。とはいえ、著者としての責任を回避しようなどと考えるものではない。忌憚なき批評は経営学のためには非願したいところである。

最後に、本書なるに当り丸善株式会社出版部の方々の誠意溢れる援助と激励とに対し心から謝意を表したい。

昭和五十年十一月 横浜美しが丘の寓居にて 白雪の富嶽を仰ぎつつ

山本安次郎

目次

第一編 序論——課題と方法	一
第一章 経営学研究方法論の意義——経営学の現状と方法的反省	三
一 序言——問題の意義	三
1 経営学と研究方法論——有用説と無用説(三)	3
観説と悲観説(五)	
3 問題の提起と限定(六)	6
2 経営学の現状認識の問題——案	
二 経営研究の発展と多様化	八
1 経営構造の発展と研究の多様化(八)	8
2 経営構造の複雑化と研究分業論(一〇)	10
3 インタディシプリナリー・アプローチとシステム・アプローチ(一二)	12
三 経営研究の多様化と統一の要求	二三
1 分業論と協業論(二三)	23
2 経営研究と経営学研究(二四)	24
3 経営の経営的研究と	
経営学(二五)	
四 経営学的方法的反省の必要	二六
1 経営学とは何か(二六)	26
2 経営学の対象と方法との反省(二七)	27
3 「経営の学」としての経営学(二八)	28
五 結 言	一九

注

一九

第二章 経営学研究方法論の基本問題

二四

一 序 言

二四

- 1 経営学の反省と反省の方法(四) 2 方法的反省の方法(四) 3 問題の提起と限定(五)

二 経営学と経営——経営学の対象の問題

二六

- 1 経営学の基礎としての経営(二六) 2 経営学の対象としての経営(二六) 3 経営の発展と経営学の発展(二六)

三 経営の研究方法——経営学の方法の問題

三三

- 1 経営研究の中心問題——経営の把握(三三) 2 経営の研究方法——経営の把握の方法(三三) 3 歴史的、理論的、政策的研究方法(三三)

四 経営学の方法——経営学の学理的性格すなわち学理の問題

三五

- 1 経営の研究と経営学の研究——経営学と経営学本質論(三五) 2 経営学研究の方法(一)——学理的研究方法(三六) 3 経営学研究の方法(二)——学理的研究方法(三六)

五 結 言

四〇

注

四〇

第二編 経営の研究法論

四七

第三章 経営の歴史的研究方法

四七

一 序 言	四
1 経営の歴史的認識と経営学(四七)	
2 経営の歴史性(四八)	
3 問題の提起と限定(四七)	
二 経営の起源——経営の近世史ないし前史	五
1 経営の起源の問題(五)	
2 商業経営の成立と商業経営学(五三)	
3 商業経営の発展と新しい商業経営学(五五)	
三 経営の成立と成長——経営の近代史	六
1 経営の成立の基盤——産業革命と産業社会(五六)	
2 株式会社企業と経営の成立(五六)	
3 経営学の基礎としての経営の成熟発展(五八)	
四 現代の経営——経営の現代史	六
1 現代経営の背景——技術革新と高度産業社会(五六)	
2 現代経営の構造のおよび機能のないし過程的特質(五七)	
3 現代経営の動向と経営学の問題(七二)	
五 結 言	七
注	七
第四章 経営の理論的研究方法	八
一 序言——現代の経営学	八
1 経営の歴史的研究と理論的研究(八二)	
2 分析論理の重要性和その限界(八三)	
3 問題の提起と限定(八五)	
二 経営存在と分析方法	八
1 協働体系としての経営(八八)	
2 経営分析の多様性(九一)	
3 経営存在に必然的	

な分析方法(九三)

三 経営の客体的分析方法…………… 九三

1 経営の客体的な構造と過程とその分析(九三)

3 本格的な経営分析論(一〇〇)

四 経営の主体的分析方法…………… 一〇三

1 経営の主体的な構造と過程とその分析(一〇三)

3 本格的な経営分析論(二一〇)

五 結言——経営分析の本格化…………… 一二一

注…………… 一二三

第五章 経営の政策的研究方法…………… 一二三

一 序言——転換期に立つ現代経営…………… 一二三

1 技術再検討と現代経営の構造変動(一二三)

3 問題の提起と限定(一二六)

二 経営の主体性と政策の問題…………… 一二六

1 経営実践の主体的構造と政策(一二六)

3 経営政策の価値的基礎(一二三)

三 経営の構造変動と構造政策研究…………… 一二三

1 経営実践と政策の問題(一二三)

2 構造変動期と構造政策の問題(一二四)

3 いわゆる戦略的要因としての政策研究(一二五)

四 転換期に立つ現代経営と経営理念の問題…………… 一二七

1 政策の二義——方策と政策(三七)	2 構造変動期における二つの基本政策(四〇)
3 経営理念の再検討——新理念論(四二)	
五 結言——会社から公社へ……………	一四六

1 これまでの考察の総括(四六)	2 会社から公社へ(四七)	3 経営政策の主体と 国家の問題(四八)
------------------	---------------	-------------------------

注……………	一四九
--------	-----

第三編 経営学の研究方法論……………	一六二
--------------------	-----

第六章 経営学の学史的研究方法……………	一六三
----------------------	-----

一 序 言……………	一六三
------------	-----

1 学と学史——経営学の歴史性と社会性(六三)	2 歴史的研究方法の重要性(六五)
3 問題の提起と限定(二六)	

二 経営学の起源……………	一六七
---------------	-----

1 経営の起源と経営学の起源(六七)	2 商業経営学の起源——サヴァリー『完全な 商人』を中心にして(六八)	3 商業経営学の発展——マールベルガー、ルドヴィッ チ、ロイクス(七〇)
--------------------	--	---

三 経営学の成立……………	一七四
---------------	-----

1 ドイツ経営経済学の成立(七四)	2 アメリカ経営管理学の成立(七五)	3 わが 国経営学の成立(七八)
-------------------	--------------------	---------------------

四 経営学の発展——学説の多様性と統一への努力……………	一八九
------------------------------	-----

五	結	言		三三
注		三六		

第七章 経営諸学説の比較的研究方法 二二

一	序言——分析と比較		二二
---	-----------	-------	----

- | | | | | | |
|---|-----------------|---|----------------|---|--------------|
| 1 | 比較的研究方法の重要性(二四) | 2 | 比較的研究方法の分類(二五) | 3 | 問題の提起と限定(二五) |
|---|-----------------|---|----------------|---|--------------|

二	国別的比較研究——ドイツ経営学とアメリカ経営学		二四七
---	-------------------------	-------	-----

- | | | | |
|---|---------------------------|---|---------------------|
| 1 | 学史(歴史)の比較(相違性比較(1)(二四七) | 2 | 学理の比較(相違性比較(2)(二四九) |
| 3 | 国籍を越えて(相違性比較から同一性比較へ)(二五) | | |

三	学説別比較研究(1)——経営経済学説と経営管理学説		二五三
---	---------------------------	-------	-----

- | | | | |
|---|---------------------|---|-------------------------|
| 1 | 対象の比較(相違性比較(1)(二五三) | 2 | 観点(方法)の比較(相違性比較(2)(二五五) |
| 3 | 対立を越えて(同一性比較)(二五) | | |

四	学説別比較研究(2)——経済学説・管理学説と組織学説		二六〇
---	----------------------------	-------	-----

- | | | | |
|---|---------------------|---|-------------------------|
| 1 | 対象の比較(相違性比較(1)(二六〇) | 2 | 観点(方法)の比較(相違性比較(2)(二六四) |
| 3 | 近代を越えて(同一性比較)(二六) | | |

五	結言——経営学とは何か		二六九
---	-------------	-------	-----

注		二七〇
---	-------	-----